

(3) FD 集会（令和 3 年 2 月 15 日）

「『私のオンライン授業・オンデマンド授業』事例紹介」

【企画の趣旨】

本年度の授業体制は新型コロナウイルス感染予防対策として、一定の制約がありました。この状況は未だ解消の見通しがたちません。そのような状況下、今後も工夫しながら授業を実施していくことが課題として考えられます。

そこで、本学の先生が行ったオンライン授業・オンデマンド授業の事例を紹介していただき、今後の実施アイデアの一つとして共有できればと考え企画しました。

【実施概要】

開催日：令和 3 年 2 月 15 日（月）
開催時刻：15:00 ～ 16:30（受付開始 14:40～）
場 所：愛知教育大学 次世代教育イノベーション棟
開催方法：対面方式、Teams でのオンライン方式
参加対象：本学教員、事務職員
集会タイトル：全学 FD 集会「『私のオンライン授業・オンデマンド授業』事例紹介」



【プログラム】

時刻	時間	項目（タイトル）	担当者
14:40～		受付開始	
			司会：森 FD 部門代表
15:00～15:05	5 分	開会あいさつ	杉浦理事
15:05～15:10	5 分	趣旨説明	森 FD 部門代表
		各授業担当者からの報告	
15:10～15:40	30 分	授業実践例①	成瀬麻美先生
15:40～16:10	30 分	授業実践例②	阿部亮吾先生
16:10～16:25	15 分	質疑応答	司会：森 FD 部門代表
16:25～16:30	5 分	閉会あいさつ	森 FD 部門代表

【開催報告】

2021 年 2 月 15 日 全学 FD 集会「『私のオンライン授業・オンデマンド授業』事例紹介」を行いました。

2 月 15 日（月）、教職キャリアセンター主催の全学 FD 集会「私のオンライン授業・オンデマンド授業」事例紹介を実施し、オンライン参加を含めて 45 人の教職員が参加しました。

今年度前期は、本学も他の大学同様、新型コロナウイルス感染症の影響で、原則遠隔授業となり、学生・教員・職員全員がはじめての経験に試行錯誤しながらの実施となりました。コロナ禍のこの状況は未だ終息の見通しが立たず、今後も工夫をしながら授業を行う必要があります。この FD 集会は、本学の教員が行ったオンライン授業・オンデマンド授業の好事例を紹介することで、今後の授業実施のアイデアを共有するために企画されました。



成瀬麻美講師

まず、リアルタイム型のオンライン授業の事例として、保健体育講座の成瀬麻美講師より「初等体育科教育内容 AII」が紹介されました。この科目は 1 年生 68 人を対象とし、小学校の体育授業に関する指導法を学ぶ内容となっており、表現運動を取り上げ発表されました。コロナ禍の中、成瀬講師は

学生の学びを深めるために Zoom を用いた授業を選択しました。自身も初めて利用する Zoom で、不安の中で始めた授業でしたが、「結論としては、やってよかった」と成瀬講師は話しました。音と動きにタイムラグがあったり、生徒同士の身体的なコンタクトができなかったりと、対面でしかできないこともありました。一度にすべての学生の動きを把握し、フィードバックできるなど、対面以上にできたこともありました。また学生にとっても、対面では感じる恥ずかしさがなく自分のペースで動けたり、動画で復習したりできるメリットがありました。学生のアンケートでは、「孤独感を感じなかった」「オンラインならではの楽しさがあった」という感想が寄せられました。また、この授業自体が成功しただけでなく、自身のオンライン授業の経験を、学校現場で体育の授業に困っている先生方へ還元できた、という広がりも生まれたそうです。



阿部亮吾准教授

准教授自身がワイプで出演し、音声だけでなくジェスチャーを交えながら解説を行いました。自身がワイプに顔を出したことは、「先生に見られている感じがして、緊張感をもって聞くことができた」と学生にも好評だったそうですが、慣れないうちは動画作成に大変苦勞し、1 回（90 分間）の動画を作成するのに何度も撮り直して 3 日かかってしまい、毎日同じ服装、髪型、カメラ角度にして撮影したそう

次に、オンデマンド授業の事例として、社会科教育講座の阿部亮吾准教授から「地理学基礎 I」が紹介されました。この科目は 1 年生 115 人を対象とした地理学の入門科目で、オンデマンド教材による講義と実際に講義で学んだ内容を現地で確認するフィールドワークから構成されています。阿部准教授は、オンデマンド教材として地図などのビジュアルな資料をふんだんに使ったパワーポイント資料を準備しました。パワーポイントで作成した動画資料には、阿部

です。このほかにも、オンデマンド授業の効果をあげるため、穴埋め式プリントを作成して、学生が動画を見ながら作業できるようにしたこと、学生がメールで提出する課題や質問・感想には必ず返事を書き、間違いや着目点を指摘したことが紹介されました。また動画では、授業で話したことが本当にそうになっているかを現地に行って確認するように、というメッセージを学生に向けて添えました。これらの結果、学生アンケートでは「自分で問題点を深く考えた。さらにその考えに基づき行動した」「新たな思考を展開した。さらにその思考に基づき行動した」のスコアがいずれも 90% 近くという結果となりました。

2 件の事例紹介を受け、最後に FD 部門代表の森勇示教授は「2 つの授業の共通点は教員自身が楽しんで行っていること、内容が充実していることだと思います。学校現場でよく言われることですが、『良い授業とは、準備がよくできた授業だ』ということを感じました」と閉会のあいさつを述べました。森教授の言葉どおり、どちらの事例も周到に準備されており、今後の授業のヒントとなる有意義な FD 集会となりました。

F D 集会の様子

【司会（森F D部門代表）】 それでは、時間になりましたので、会を始めさせていただきます。

皆さん、こんにちは。F D代表の森と申します。

今回は、「私の授業紹介」ということで計画いたしました。会議に先立ちまして、理事のほうより御挨拶いただきたいと思います。よろしくお願いします。

【杉浦理事】 失礼します。教職キャリアセンター長を努めております杉浦です。

本日は、全学F Dということで企画いたしましたところ、保健体育講座の成瀬先生、それから社会科教育講座の阿部先生のほうに「私のオンライン授業・オンデマンド授業」ということでの事例発表をお願いすることができました。ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

実は、今日午前中、豊橋南高校の教育コースの修了式というものに出かけてまいりました。愛知県立高等学校で教育コースを持っているところが半田東高校、そして豊橋南高校、2つございまして、両方とも今年の3年生が1期生ということで、ゼロからのスタートということで、両校とも教育コースをどういうふうにしていくかという形でやっていたわけです。本学の先生方に大変御協力をいただいてありがとうございましたというお礼をいただいてまいりましたのでお伝えします。

教育コースの子供たちが最後のところでメッセージ集というものを作っているようです。それを今日、朝いただきました。1つ目に載っていた、3年生から1・2年生の子たちへメッセージが、「いろいろなものを見たり、体験したりして好きなことを見つけよう、そして学び続けることが大切。」というふうに書いてありました。昨日や今日、できなかったことをまたもう一度チャレンジするために明日があります。一日一日頑張りましょうというような形で非常に前向きに教育に関する事柄について、まとめて研究して発表をしていました。大学でさらにその学びを続けられることを非常に楽しみにしている、そういうことがうかがわれました。

新型コロナウイルス感染症が拡大する中で、先生方が行っていたい授業が対面式ではできずに、オンライン・オンデマンド等々を工夫しながらしていただく状況にはなっておりますが、ぜひその新しいスタイルの中でよりよい学びがつくれますように、皆さん互いにいろんなものを見ながら研究していただけるとありがたいと思っております。先生方の授業を期待して、今高校生たちが本学を目指して頑張っていることを、今日午前中確認してまいりました。先生方が今後とも授業のほうを工夫改善しながら進めていただいていることを祈念して、そして今日はF D講演会、これが有意義なものとなることを祈念いたしまして挨拶いたします。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

【司 会】 杉浦理事、ありがとうございます。

それでは、早速やっていききたいと思います、その前にちょっとだけ趣旨を説明させていただきたいと思います。

全学F Dとして、今年は御存じのようにコロナの関係で、遠隔授業に際して先生方皆さんが御苦労されたんじゃないかと思います。慣れていない初めての営みかなと。あわせて学生もじゃあどうやって受講したらいいんだという、そういう両面からの不慣れな点をを少しでも緩和できればという趣旨で考えさせていただきました。

今日はお二人の授業紹介ということで、オンラインのほうで体育の成瀬先生、それからオンデマンドのほうで社会科の阿部先生が代表して、どういう授業をされたかということで、お互いの実践例を見ながら何かのヒントを得ていければと思います。

この状況まだ続きますので、この後期もそうですけれども、来年の授業、まだ遠隔授業、部分的に、あるいは全面的にかも分からないですけれども、続くというふうを考えまして、それぞれのメリット・デメリットをお互いに考え合いながら本学の教育活動をより充実させることにつながればと、そういう願いでもって計画させていただきました。これで趣旨説明は終わらせていただきます。では、早速授業紹介のほうをお願いします。最初に成瀬先生。

「私のオンライン授業紹介」

講師：成瀬 麻美（保健体育講座）

皆さん、こんにちは。

保健体育講座の成瀬といいます。本日はよろしくお願いいたします。

私は、オンラインの授業紹介ということで、前期にリアルタイムでZ o o mを用いて実技を行いました。その授業のことについて紹介をさせていただきたいと思います。

まず初めに、ちょっと謝罪からいきたいと思うんですけども、4月21日に戸田教務企画課長のほうから全学的にメールが流れてきました。その内容は、遠隔のみによる実施の通達で、授業方法は遠隔かつ時間差での実施が可能なものというふうに流れてきています。そのため、私が行った授業はリアルタイムで、その時間に学生たちに家で授業を受講してもらうというものですので、この通達とは少しやり方が異なるものとなってしまいました。ただ、この授業をより学生たちに学びを深めたいという思いから、学生たちの同意を得てこのような授業方法にさせていただきました。恐らく今後の先生方はオンデマンドの授業をされるかと思うので、少しずつくる内容になるかもしれないんですが、私もこのリアルタイムの授業を通していろいろとつながったことなどもありますので、そのようなことも踏まえながら本日は発表をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

まず、実際に行った授業の説明をさせていただきます。

リアルタイムでZ o o mの授業を行いました。授業名は初等保健体育科教育内容AⅡということで、体育科の1年生の68名の授業になります。内容は、領域が保健体育はいろいろとあるんですが、その中でも表現運動のリズムダンスの内容を行いました。恐らく先生方もいろいろとイメージがあると思うんですが、球技とかですとなかなかオンラインでできないかなというふうに思うんですが、リズムダンス、ダンスだったら、もちろん対面でいろいろとやらないといけないことがたくさん、そこでの学びがあると思うんですが、ただ1人でもできなくはない、まだオンラインの可能性があるということで、なのでリアルタイムでやろうというふうに決めました。

ただ、私もこのZ o o mを使ったのは本当にこの4月が初めてで、Z o o mの使い方も全く分からなくて、どのようにやったらいいかも全然分からなくて手探りな状態でした。なので、実際本当にできるのかなというものすごい不安の中4月を過ごしました。ただ、とにかくやってみないと始まらないという思いで、とりあえずやってみようということでやりました。ただ、やはりリアルタイムですので、その授業時間内に授業が受講できない学生もいると思いますので、学生にはその授業の動画をオンデマンド配信を併用して、別途課題をつけてということも同時に行いました。学生には全てリアルタイムで授業を実施することは同意を得て実際に行いました。

まず結論からお伝えしますと、やってよかったというところが一言に尽きます。その内容を、学生からのフィードバック、教員自身の発見、思いがけない広がりのお話という3本立てでお伝えしていきたいと思います。

ではですね、その動画を実際に見ていただいたほうが早いと思いますので、実際の授業の映像をまとめたものを御覧ください。

これは1時間目のときです。私がここの左の上に、左から2番目のところにいます。学生はこの画面いっぱい私が一人居るような状態で、私の動きをまねしている状態です。私はこれ、ギャラリービューというふうに言うんですが、1画面に50人、こういうふうに見えるような状態で実際授業をして、動きながら学生たちの動きを見るというようなものをしていました。Z o o mですので、対面ではできないような動きを何かしたいなと思って、近づいたり離れたりするようなことや、あとフレームアウトして出てくるとか、このオンラインならではの楽しさというのを少し意識しました。

これは2時間目なんですが、この前にブレイクアウトルームといって、2人組でちょっと動きを創作して、今これ、そ

れぞれ発表しているというようなものです。何か決まった動きを覚えて踊るのではなくて、あくまで自分たちで即興的に動くというのが、リズムダンスでは大事になってくるので、そういうふうに必要な動きを即興的に動いているというような状況で、2回目の授業です。

次に3回目なんですけど、これスポットライトと言って、いい学生をスポットライトで画面をいっぱいにして、今これ十五夜さんのもちつきという手遊びをしているので、この画面の学生も自分が手遊びしているような感じで実施しています。なので、みんなには画面に1人の学生が映っていて、このように一緒にやっているというような状況ですね。これ画面固定で動きのまねということで、この中でみんなは誰でも画面いっぱいに映すことができるんですね。なので、自分のペアを初めに決めて、じゃあこの人を画面いっぱいにしたいと思ったら、その人の画面をいっぱいにして、画面上で互いの動きをまねするというようなことを行いました。これをするすると私の声が聞こえて、音楽も聞こえたまま、みんなそれぞれ2人組で互いの動きをミラーのような形でまねすることができるというような活動になります。これはブレイクアウトルームと言って2人ずつの部屋をつくって、それぞれ2人組で動きをつくっているのを、私が実際に入って見ているというような、そういう部屋もあります。それで、ブレイクアウトルームが終わったら、じゃあその動きをみんなでやってみようと言って、これ実際にやっているものですね。2時間目よりもだいぶ、ちょっと動きがダイナミックになってきていることが分かるかと思います。

今度は、面白い学生をスポットライトでこうして、それを動きをまねするという、4時間目まで私のまねをずうっとしてもらったんですが、5時間目からはいろんな学生にふって、その学生のまねをしようというような形で行いました。学生も止まる学生がおらず、みんな自分で動きを、これは全て即興で学生が動いている動きをみんながまねすることです。

5時間目の最後なんですけど、音楽をかけてめちゃくちゃダンス〜って言って、踊ろうと言って、初めはたぶんすごくみんな固かったと思うんですけど、ここからも分かるとおりに、かなり熱気が、この画面上の中でかなり熱気があるのが伝わってきます。

これが最後になるんですが、ブレイクアウトルームで、それぞれ6人で、少し即興的な動きが中心になるんですけど、ちょっと創作をしてまとめてというようなブレイクアウトルームを用いて、最後にこれは交流会で、6人が1組なので、ここが今ちょっと踊って、もうひと画面でまだ踊っている人がいるんですけど、踊っている人と一緒に回っている、それを見て盛り上がっている人というような形で最後、交流会を行っています。

これは今少しの人数なんですけど、これがみんな全員回ってくるんですね。一番最後は全員スポットライトダンスということで、68人こういうふう全員をアップにして、みんなその学生の動きをまねしようというような動きにしました。これも本当にみんな、むしろ前の人がやった動きじゃない動きをしようというような、どんどん自分で動きを新しいものを開発していこうというような気持ちがすごい見られて、とてもみんな個性あふれる動きを出してくれていました。

ダイジェストですけど、大体こんな形で6時間の授業を行いました。

そうしたら、まず学生のフィードバックから授業の評価を、これは授業改善のためのアンケート結果で、全学的に行ったものの自由回答と、あと私が独自に、実際にこの授業が終わった後にアンケート調査をしたものの回答になります。

ここに書かれているみたいに、孤独を感じず楽しかった。実際に体を動かしてできたので対面のような授業が受けられた。みんなの動きを対面以上に見て回れた。周りに流されずに自分らしい動きができた。この周りに流されず自分らしい動きができるというのは、すごく多かったのが、対面のときよりも恥ずかしくなかったという感想がものすごく多かったんですね。恐らく対面のときだと、やっぱり誰かに見られている、周りにみんながいるという状況が恥ずかしいと思うんですけど、この授業に関しては家で、家族がいるかもしれないんですけど、基本的には1人で受講ができる。なので、ほかの人を気にせずに、本当に自分の身体と向き合って授業が受けれたというような感想が多くありました。

あと、ダンスを通して人と人とがつながっているのを感じ取れたということで、オンラインなので実際の空気感とかは

感じ取れないんですが、ただ、みんなでオンラインだからこそ手をつないだ動きをしたりだとか、そういう動きをすることによって、何かみんなで一緒に授業を受けているような感じも取れたかなと思います。オンラインならではの楽しさがあって、この状況になってしまったことをプラスに捉えることができたということで、1年生だったので、まだ同じ科の、体育科の仲間の顔と名前が全く一致していないという状況のオンラインの授業のスタートだったんですね。なので、恐らくすごく不安な学生も物すごく多かったです。ただ、やっぱりこの授業を受けてお互いの顔と名前を知ることができたり、この状況だからこそこういう状況を逆に楽しんでやったというような、そういうような感想もありました。オンラインでこんなに楽しい授業ができるとは思っていなかったから感動したという意見もありました。なので、これがオンデマンドだったら、恐らくこのような感想は出てこなかったかなと思いますので、やはりリアルタイムで同じ時間にみんなで顔を見合わせて授業をするというところの価値が今回はあったのではないかと思います。

そうしたら2番目に私自身の発見から、3つの観点からお話しさせていただきたいと思います。

1つ目は、対面よりも、このオンラインのほうがよりできたということからお話ししていきたいと思います。

まず、これは左側は対面の写真で、これはオンラインの写真なんですが、やはり対面だと自分の見ている範囲の学生しか見ることができません。ですが、オンラインですと、この1画面にこれ50人で、68人なので、これを違うページに送れば2画面で全員の動きが把握できます。ですので、対面のときよりも一人一人の動きを把握することができたというようなメリットがありました。あとは、名前を呼んでのフィードバックということで、ちょっとここの画面にはないですが、この画面の左下に一人一人名前が表記されるんですね。その名前を自由に自分で変更することができます。例えば私、成瀬麻美で、名前と呼んでほしい、名字か名前と呼んでほしいほうを平仮名にしてくれます。なので、例えば下の名前と呼んでほしかったら「麻美」の部分を平仮名にして、この名前を変更します。そうすると、この子が誰なのかというのが、名前がみんなについているので、個別の名前を呼んで、いいねとか、そういうふうにフィードバックをすることができたというのも対面よりもできたことかなと思います。

あとは、学生自身としては、先ほどもお伝えしたように、誰かに見られているということがないので、自分自身の体と向き合って動けるということ、あとは動きの発見、このオンラインならではの動きを発見する、新しい動きを発見する手がかりを得ることができた。

あとは動画での復習ということで、この動画、実際にこのZoomで受けた授業を全部録画して、オンデマンド型用に配信をしたので、実際にこのZoomに参加した学生も後で復習をできるように、このオンデマンドの動画を見ることができます。対面だとなかなかそれがやり過ぎして、何となく楽しかったで終わっちゃうんですが、そういうふうに復習ができるというのが1つよかった点かなと思います。

あと、対面と同じことができたということで、やはりなかなか対面じゃないとできないかなと思ったんですが、意外と同じようなことができたという発見がありました。1つはブレイクアウトルームということで、このようにみんなが映っているものではなく、少人数の部屋に分けることができます。対面の授業でもこのようにグループワークをするかと思えます。それと同じような機能がZoomにはあり、それを行うことができます。そのグループ活動の中に教員がグループを見回って入ることもできます。で、どのような活動をしているかなというふうに思いながらそれぞれのグループに入ってフィードバックできたというところもあります。なので、グループ創作を学生もできたというところですね。

あとは、よい動きの学生を抽出ということで、スポットライトビューという機能なんですが、私が選択した学生が画面いっぱいに出て、みんなも画面いっぱいにその学生が現れて、じゃあその動きの学生をまねしようというふうに、そういうこともできました。ふだんの対面の授業でも、あついなと思った子の動きを紹介するんですね。そうすると、学生がその動きを見て、こういうふうに動けばいいんだ、こういう動き方もあるんだというふうにどんどん思考が広がっていきます。そのような同じようなことが実際にスポットライトビューを使うことでできたというところですね。

あと、画面固定ということで、これに気づいたのは5時間目ぐらいで、最初のほうは正直気づかなかったんですけど、

このスポットライトビューですと、結局1人の学生のまねをみんながするという状況しかつくれなくて、本当は2人組で互いに音楽をかけながらお互いのまねをするということを、即興でまねするということをしたいなと思ったんですけど、それがなかなかブレイクアウトルームですと教員が回らないと教員の声も入らないし、音楽も共有できないので、どうしたらいいんだろうというふうにちょっとずっと悩んでいたんですけど、画面固定して、お互いに動きをまねし合えばいいんだということに5時間目ぐらいから気づきました。ですので、即興的な動きのまねもできるというようなところが新たな発見でした。

あとは、やはり対面でしかできないことはあると思います。一番の今回問題は、音と体の一体感ということで、やはり時差が生まれるんですね、実際私が流した音楽と学生の動きは遅れて学生の動きが見えるので、なので音楽に合った動きをしているのかとか、音楽をどういうふうに捉えたのかというところは、やっぱりちょっと分からなかったというところと、やはりコンタクト、接触をものすごい普通の授業は大事にしています。実際の体の感覚、実際に手をつないだりしないと相手の体を感じ取れないところもたくさんありますので、なのでやっぱりそういうことができないなというところは、やはりオンラインの限界かなというふうに感じた部分でもあります。

あとは、後半は思いがけない広がりのお話ということで、実際にこの授業をやった上で、いろんなところに広がっている活動ができるようになりました。このことを少しお話ししていきたいと思います。

まず1つ目、実技研修会ということで、これはですね愛教大体育学会という愛教大保健体育科の卒業生によるOB会の組織があります。そこのある校長先生、浄水北の校長先生なんですが、その先生から、今このコロナの時代で現場はとても体育の授業をどうやったらいいか困っている、何か情報があれば教えてほしいというような、そういう問合せがありました。それは大体4月ぐらいですね。その中で、じゃあ現場の問題は何か、大学教員がそれに対して何か回答できることがないのか、そういう場を持つことができないのかということで、愛教大体育学会が主催となって、「withコロナ時代における体育を考える会」というような体育ミーティングを週に1回開きました。いつも金曜日の5時からZoomを開いて、出入り自由でいろいろな議論をしていくというような会になります。その浄水北の校長先生が発信してくださったので、浄水北の先生方がその会議に参加してくださっていました。その浄水北の先生が、体育の中で今はダンスが一番やれる可能性があるんじゃないか。ただ、ダンスって何を目指していいか、どういうふうに自由な動きを引き出していいか、どういう子供の姿を目指していいのかが分からないというような疑問を投げかけてくださいました。ただ、やっぱり対面で直接会ってなかなかお話しすることができない状況だったので、今オンラインで学生に対しても授業をしています。なので、もしよろしければこういうオンラインの形で、実技研修会という形でやりませんかというようなことを提案させていただきました。これが実際そのときのコマになります。ここに映っているのがその浄水北の先生方ですね、3名いらっしゃいます。私がここにいるんですが、あとは、例えば附属小の先生も附属小からリアルタイムで参加してくださったり、あとは大学院生も参加してくれたり、卒業生も参加してくれたり、卒業生、現職の教員ですね、も参加してくれています。あと、ここにちょっと映っていないんですが、これは保健体育科の鈴木一成先生が自宅から実際に小学校6年生の息子さんと一緒に参加をしてくださっていました。ですので、実際にこの内容が小学6年生で果たしてやれる内容かというところも一緒に検証できたというところもありますし、こういうオンラインでしかきっと集まらないようなメンバーが集まったというところも、このオンラインならではのいいところかなというふうに感じています。

それで、こういう研修会をして、ざっくばらんに質疑応答をしながらという形で1時間半ぐらいで終えました。現場の先生方のニーズに応えることができたということで、恐らく私がオンラインで授業をしていなかったら、たぶんこういうアイデアも思いつかなかったと思います。ですので、そういう授業をすることによってこういう現場への還元、広がりということもできたというところが一つ特徴としてあります。

2つ目はですね、附属の先生方との研究ということで、これは附属名古屋小で実際に小学校1年生のリズムダンスの授業です。これはどういうことかという、私と私のゼミ生が実際に行って、3台のカメラでその授業をZoomで中継を

しました。3台カメラがあるので、これは私のカメラなんですけど、私のカメラはちょっと特徴的な子を追っていて、これは全体を追って、このカメラは先生を追うというような形で3つの視点でカメラを設置しました。これがどこにつないでいるかというと、大学につないでいます。このときちょうど教育実習の補填授業をしなければいけないという週で、実際に学生は教育実習の期間が短くなったので、その分補填授業を受けなければいけないということで、先生方も恐らく大変な思いをたくさんされたかと思うんですが、その一環として、その大学につないで、大学の一部の学生がそれを見て実際に授業について議論するというようなところにもつながりました。なおかつこの授業は、この井上先生という先生なんですが、ちょうど体育科教育という雑誌の依頼がありまして、このコロナ時代にダンスで工夫して授業されている人を紹介してほしいというふうにちょっと依頼があつて、ちょうど井上先生にその依頼をして、この授業実践が実際に体育科教育に載ったということもあります。

あとは、何も資料はないんですが、附属高校に今自分自身の教え子が常勤講師として働いています。このオンラインの授業をやはり附属高校もやらないといけない状況で、ただ、やっぱりどういうふうにやったらいいのか分からないというような問合せがありました。それも自分の授業をしている段階だったので、実際具体的にどういうふうにやったらいいのかというような話をしながら共同研究を実際にしたというようなことにつながっています。

あと、最後になります。これはちょっとずれるかもしれないんですが、M1Aの教材共有ということで、私後期にM1Aの体育科教育の講義も15回持っています。そこではリアルタイムではなくて、オンデマンド型の授業を行いました。今回は全部パワーポイントの資料に、自分の動画の音声をふきこんで動画を配信するというやり方でやっていました。ただ、やっぱりやりながら自分自身があまりここ少し深まっていなかったとか、そういうことに気づいたということもあって、同じ保健体育講座の上原先生や縄田先生とそのような情報を共有しながら、私は体育科教育の中でも特にダンスが専門で、上原先生は器械運動、縄田先生は球技ということなので、餅は餅屋じゃないですけども、それぞれの持っている教材をお互いに共有して、よりいいオンデマンド型の資料を作っていこうというような、チームとして、個人で何かやるわけではなく、チームとしてこの危機を乗り越えていこうというようなところにも今回つながったかなと思います。

最後にまとめになります。実践を終えて、取りあえず準備をものすごくやっぱり大事にしないとイケないなとかなり痛感しました。やはり初めてのことで、すごくトラブル続きでした。ただ、やはりそのトラブルを最小限に抑えるためにどのような手順で何を初めにやったらいいのかということをもものすごいシミュレーションして授業を実施しました。やればやるだけノウハウがたまるということで、やはり私も初めは半信半疑で、正直こんな授業で対面よりも絶対にいい授業をやれないというようなところがどこかにあったんですが、本当に終わってみれば対面と同じぐらい、対面より逆にもっといいこともあった授業だったなというふうに感じる事ができたので、やはりやって、自分自身で問題を見つけて、それをどうしたらいいのかというふうに調べてやるということで、より質の高いオンラインの授業ができるんじゃないかなというふうに思いました。

最後に、やはり、ただ対面でしか味わえないということも改めて考えさせられました。ただ対面ができないからということではなくて、対面ぐらい同じ価値を学生に、学びの価値を味わわせたいという思いから、今回私自身実施して、学生のほうからも、やっぱりこの授業のおかげで前期の授業がすごくつまらなかったけれども救われたというような感想もありましたし、私自身も学生と、やはり1年生でフレッシュな学生と会えない、なかなか授業で会えないという寂しさもありましたけど、やっぱりこの授業を通して学生と一緒に共に学び合うということがすごく大事なということも考えさせられました。ですので、対面でしかやれないこと、あとはオンラインでしかやれないこと、それぞれの価値を考えながら、それぞれの価値をもう一度確かめるいいきっかけにもなったというふうに感じています。

では、私の実践はこれで報告を終わります。ありがとうございました。

【司 会】 成瀬先生、ありがとうございました。

画面上はねてるシーンが印象的で、学生からのフィードバックも、まさに周りに流されず、自分らしさを発揮した実践

のような感じがしました。

続きまして、社会科のほうから阿部先生に紹介をしていただきたいと思います。今ちょっと接続をしていますので、少々お待ちください。

今日はお二方の発表の後に、T e a m s の方はチャットにて質問を受け付けます。もちろんフロアからの質問も後ほど質問を受け付けますので、後でさらにお尋ねしたいことがあるかどうかということを、練っておいていただけるとありがたいなと思います。

今ちょっとすみません、接続でこれから画面が出るということで少々お待ちください。

接続にもうちょっと時間がかかるということですので、成瀬先生の実践について質問があるとしたら、チャットで送っていただければと思います。あるいはフロアの方からは何かございますでしょうか。

単純な質問なんですけど、Z o o m で学生にプロダクトキーを渡したというかそういうことなんですかね、行うとき、Z o o m は1年生、新入生は新しいパソコンをみんな購入しましたよね。それを使ってZ o o m のプロダクトキーですかね、ライセンスキーを渡してしてやったと、そういう形でよろしいでしょうか。

【成瀬麻美先生】 そうですね、私がZ o o m のまず有料会員になりました。そうすると、その有料会員になると、そのミーティングを開くときにI D とパスワードを学生がZ o o m からそれを入力すればその部屋に入れるというような仕組みになります。

【司 会】 入れない学生はいたんですか。

【成瀬麻美先生】 特に問合せはなくて、皆さん入りたい学生は入れた。

【司 会】 最初から全員という。

【成瀬麻美先生】 そうですね。なので事前にどのようにそのアプリをダウンロードするだとか、どのように入るのかという詳細な資料をパワーポイントにして、それをまなびネットでオンデマンドで配信をしています。

【司 会】 ありがとうございました。

あと、ペアで即興で踊るときに、その音楽というのは同時に同じタイミングで2人に聞こえる、さらに68人全員同じ音楽が聞こえているということでもいいんですか。

【成瀬麻美先生】 はい、そうですね。ブレイクアウトルームのとき以外はすべてそのような形で聞こえています。なので、私がパソコンのほうから音楽を流して、その音楽が全員に共有されているというような状況です。

【司 会】 分かりました、ありがとうございました。

何かT e a m s のほうから質問来てますか。

今のところないですか。

あと、さっきの6回の授業だったというふうに伺いましたが。

【成瀬麻美先生】 そうですね。全部で、もう一人の先生と半分半分の授業になりますので、なので私が担当するところは7回だったので、リアルタイムで実施したのが6回で、もう一つは課題というふうな形で7回を終えています。

【司 会】 分かりました。そうすると、半々で、例えば68人を34人ずつに分けるような、そういうことですか。

【成瀬麻美先生】 本来は、対面授業の場合は実技ですので、半分に分けて交代して行うというような授業だったんですが、今回はこのようなオンラインの授業になったということもあったので、その先生と相談して7回の授業を全員それぞれ半分ずつ受けるというような形に変更しました。

【司 会】 じゃあ68人一遍にだあっとやって、もう一方の先生も68人一遍にやったというわけですね。

【成瀬麻美先生】 はい、そうですね。

【司 会】 分かりました。ありがとうございました。

では、そろそろつながっているようですので、画面が出たら、次に阿部先生・・・。

『地理学基礎Ⅰ』の工夫 ―「私のオンデマンド型授業」―

講師：阿部 亮吾（社会科教育講座）

社会科教育講座で地理学を教えている阿部と申します、よろしくお願いいたします。

昨年に引き続き、2年連続でこの全学FDの場にお招きいただきまして、そういう場に私を引き上げてくれた学生には大変感謝を申し上げて今日の発表をさせていただきたいなと思っております。

本日のFDのテーマは、オンライン型の授業とオンデマンド型の授業の創意工夫ということだと思います。先ほどの成瀬先生の授業は、まさにオンラインを駆使した双方向のやり取り、その限界を突き詰めていくような授業で、大変聞いていて楽しくなるというか、その一方で90分しゃべり続ける典型的な形の授業を、しかも動画なのでちょっと成瀬先生の授業に比べたらかなり見劣りすると思いますけれども、お聞きいただければと思います。このオンデマンド型授業、すなわち私の動画が学生に非常に評価されたということで、一体どういう点が学生の評価を高くしたのか、簡単に言えば何がウケたのかということだと思います。

まずその授業内容について簡単に説明しないといけませんが、「地理学」の「基礎」の「Ⅰ」という名前の授業ですから、非常に入門的な授業なんですけれども、前期の木曜日の4限に開講をされておりまして、社会科専攻の1年生80名に向けて行われております。2020年度の前期の学生数は115名ということで、80名より多くなっているのはなぜかといいますと、社会科の免許を取得したい教育科学の学生もこの授業を受けておりますので、それで80名よりも人数が多くなっているという形になっております。

その社会科の80名の学生にとって、教員免許にも必須の授業なんですけれども、それ以外に重要な意味がありまして、2年生に進級するときに80名が哲学、歴史学、地理学、法経社の4つの専修に分かれなければいけないというルールになっております。ここで80名を4で割ると20ずつに分かれるんですけれども、当然希望が殺到する専修においてはセレクションをしないとはいけません。大体歴史学が人気で地理学は人気がないのであまり人が集まらなくて、セレクションすることはほとんどないんですけれども、たまにそういう機会がありますと、何かの判定基準を用いないといけません。そのときの判定基準になるのが、実は地理学基礎Ⅰの点数になります。点数の中で、一応高い人から取っていくんですけれども、同点だった場合、GPAを参照しながら専修の振り分けを行うための授業になりますので、社会科の80名の学生にとっては、この授業は極めて重要なんです。特に、もし地理に進みたいという学生にとっては、ここでいい点を取らないと専修分けで希望通りにいかない可能性があるという授業になっています。

そこで一体何を判定基準にしているかというのと、1つはプリント課題を必ず毎回提出するように課しました。これはオンデマンドになっているがゆえの義務という形になっています。画面に載せておりますが、大体こういうようなプリントを配付しております、学生に。私の授業は、時間と空間で読み解く名古屋の発展ということで、名古屋都市空間論、名古屋の都市の歴史地理学、名古屋の都市の文化地理学というテーマで行っています。名古屋が400年の歴史の中でどのように発展してきたのか、それはどういう要素があったのか、空間の視点から見ると、どのような新しいまちの変化を読み取ることができるのか、あるいは現在、例えば栄という街がございますけれども、なぜ栄は栄えたのか、なぜ栄はあの位置になければいけなかったのか、それら全て歴史から読み解ける、歴史と地理から読み解くことができるロジックというものが存在するわけなんですけれども、それを学生に教えていくという内容の授業になっています。例示したのは第2回目に学生に配るプリントなんですけれども、各所各所に穴があいておりまして、早い話が穴埋め形式の、いわゆる虫食い型のプリントということになっております。高校までの授業でよく使われている、受験のために使われているようなプリントと同種のものでございますけれども、ただ大学の授業ですから、このプリントの穴を埋めることが目的ではなく、授業を聞きながら埋めていく途中に、当然私から幾つかの発問があると。例えば名古屋の鉄道は斜めに東海道線が通っているんですけ

ど、なぜこのように通らなければいけないのかというのが、実は地形から読み解くことができますよと。穴埋めていきながら、当然その先にある空間のロジックみたいなものを私が解説をしていく、それを学生が見て、へえと思いながら聞いていくというタイプの授業になっているので、必ずしも覚えるために埋めるわけではなく、埋めてこれで体を動かすと何か授業に参加した気になるというのがありまして、穴を埋める形のプリントを作っています。

このプリントには私のこだわりがありまして、A4で必ず4枚、すなわちA3の表裏1枚に全て収まるようにというプリントで、このプリントを毎回全ての授業ごとに私が用意しております。この内容は市販の教科書には載っていない、全て私がゼロから集めて作り上げた授業ストーリーです。これは10年間以上かけて作り上げたものなので、割と面白く聞いてもらえているかなと思います。

このプリントは、対面の授業でやった場合と同じものを配りますが、その場合はわざわざ私に提出させることはいたしません。当然そのままお持ち帰りくださいという形なんですけれども、今回は動画を見ているのか見ていないのかが分かりませんので、ちゃんと見ないと穴が埋められないようになっていますから、ちゃんと見て穴を埋めて、それを提出する。しかもまなびネットに提出させるんじゃなくて、直接私にメールで送るようにという指示を出しております。これが後のほうに効いていくのでちょっと覚えておいてください。

これ以外、点数は何でつけるのかというと、学力テストではなく、最終レポートが大きな点数のウエイトを占めております。レポートは「阿部先生に教えたい××における〇〇の地理学」というテーマで書きなさいというような指示を出しています。「××」には場所（地名）が入りまして、「〇〇」はトピックが入ります。例えば、これは一番優秀だった学生のを少し抜粋しておりますけれども、「名古屋におけるC o C o 壺番屋のフランチャイズ戦略の地理学」というテーマでこの子は出してきました。私の授業では、基本的には名古屋市における歴史・文化地理学というテーマで十数回授業を展開しておりますので、レポートでは別にC o C o 壺番屋の話をしろとか、名古屋にきなさいとか、そういう指示は一つも出しておりません。この学生は男の子ですけれども、私の授業にインスピレーションを受けて、自分だったら地理学の観点からこんな話を考えて阿部先生に教えたいという、自らの意思によってC o C o 壺番屋を選んできたというわけですね。何でか分かりませんが、多分カレーが好きだったんだと思います。これですね、すごいセンスが問われるんですね。どういうことかということ、まず場所の選び方、一宮でもいいし、春日井でもいいんですよ。大体出身地を選ぶという学生が多いんですけれども、それも自由ですので、どの場所を選ぶかで、どういうレポートが書けるのか、どういうふうに地理学的に面白いレポートになるのかは、その最初の場所選びのセンスで決まってきます。じゃあそこで何をやるか、例えば美容室の地理学でもいいし、コンビニエンスストアの地理学でもいいんですが、どのトピックを選ぶかで面白く書けるかが決まってくるので、これはものすごくセンスが要る。そして、私の授業で何を感じたのかということ素直に反映できる学生のほうがいい点数がやっぱり取れます。これはもう地理学的センスということなんですが、それは教えるというよりも、私が名古屋の街を解説しながら、授業から受け取ってくれたものがレポートに反映されるので、点数が高い子が非常に地理学的センスが高い子になってしまいます。

そのセンスの一端がレポート例の右側にありますけれども、地図を見るとC o C o 壺番屋の分布図があるんですね。地図を1枚つけなさいという条件になっていまして、どんな地図を書いてくるのかということもやはり学生のセンスが問われるので、この子はやっぱり優れていて、名古屋に分布するC o C o 壺番屋のお店の立地を落としながら、それぞれの周りの立地条件、例えば住宅街に囲まれているのか、幹線道路沿いにあるのかということを実際に自分で歩いていってですね、確かめてきてるわけですね。私は最低でも3か所は自分で写真を撮ってきなさいというレポートにしておりますので、必ず学生自身がフィールドワークを執行し、3か所やってこないといけないんですが、その3か所というのはそのままやるとレポートでA4・4枚ぐらいにしかないんですけれども、分量をあえて指定せずに、どうやって私の指示をはみ出してくるのかなということを見ておりますので、この学生は4か所ならず10か所以上自分で回って、挙げ句の果てにはオーナーの人に直撃インタビューをし、なぜどういう客層が多いのかということまで自分で勝手に調べてきたんです。

ね。やっぱり個性というのは抑えつけてもあふれ出るものが個性だと思っていますので、私が何も言わなくても勝手にやってくるレポートにたくさん点数をあげるという、その評価基準まではしゃべらないんですけど、こっそりそういうふうにやっていますので、この学生には唯一の100点をつけました。18歳のレポートにしては出来過ぎているぐらいで、10ページ以上何も言わずに書いて出してきたんですね。私にそれをたたきつけてきたわけですね、これは私は挑戦状だと思って100点をつけましたけども。負けました。

こういうような、私が授業中にはC o C o 壺番屋の説明は一つもしていないんだけど、学生が勝手に判断して私の授業から受け取ったものをこういうふう落とし込んでレポートに書いてくれる、ちょっとオンデマンド授業の趣旨とは関係ないですけども、説明させていただきました。

最後、これもオンデマンドとちょっと離れるんですが、名古屋市のフィールドワークをやりました。授業全体は動画なんですけれども、最後の最後だけはフィールドワークを実際にやりました。学生が100名いるので、2日間に分けて50名ずつ引率するという形で、ちょっとコロナが心配ではあったんですけども、これは、ちゃんと大学の許可を得てやらせていただきました。私の授業は名古屋論ということで、名古屋の都市空間の授業を行った上で、実際にそれと同じルートを、授業でやったものを目で見に行こうじゃないかということで、私の解説つきで、この場所が授業でやったところだよということを確認して、地形は本当にここから下がっていくだろうというのを目で見ながら解説をし、学生は非常にこれがよくて、動画で授業を聞いただけじゃなくて、実際に目で見えて触れて、名古屋の街の理屈は本当に先生の言ったとおりになっているんだみたいなことを、これは理論と実践の往還なのかもしれませんけれども、そういうのをセットでやるんですよね。この写真は、ちょうど名古屋市役所ですね、地下鉄の駅に集合して、ここから大須までジグザグに名古屋の街を、南北に縦断していくというフィールドワークで3時間ぐらい歩くんですけども、フィールドワークと机上の学習を併せて私の授業が成っているということですね。ちょっと動画による授業の趣旨とは離れましたけれども、授業全体の姿を説明させていただきました。

ここからは学生によるコメントで、一体何が学生に評価されたんだろうかということなんですけど、これはいろいろな問いがありまして、問いの1は、「授業で指示された課題、参考文献、資料などを自ら参照したうえで、自分で問題点を深く考えた、さらにその考えに基づき行動をした」というところの評価ですね。「強くそう思う」が50%で「ややそう思う」が39%で、89%、つまり9割の学生がこの問いに「そう思う」と答えてくれたということですね。この辺りが、FDに私が呼ばれた理由なのかもしれません。自分で問題点を深く考えるだけでなく、学生自身が何かの行動までしてるというですね、大学の授業で本当にそんなことがあり得るのかというふうに思いますけれども、実は授業の中で、一番最後にメッセージとして、今日私がしゃべった話が本当にそうになっているのかどうか自分の目と足で確かめに行ってくださいというメッセージを毎回出しています。例えば栄をやった回においては、栄は本当にそういう街だったかどうか、その痕跡を探しに行きなさい、私のプリントを持って街に行きなさいというふうにメッセージを出しています。このコロナの中で彼らも行きづらかったと思うんですが、何人かの学生は私のプリント握り締めて名古屋に繰り出したそうです。それで本当に阿部先生が言ったとおりになっているか、今まで名古屋の街なんか単にビルがいっぱいあって、ただ歩いていただけなのに、地形にすごい高低差があったり、その間にビルがあり、その間に川が流れているなんてことは今まで一度も感じたことがなかっただろうから、授業を聞いた後では180度別の風景が見える、これはすごいことですよと。実際に行動した学生からメールもいただいていますので、やっぱり実際行動したという評価が上がるのは、そういう授業の内容にリンクをして私のメッセージを受け取ってくれたからというふうに思います。

これはまたちょっと別の角度ですけど、「授業を受けたうえで、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した」、まあこれも非常に難しい、「さらにその思考に基づき行動をした」、本当にそんな学生がいたのかどうかというふうに思いますけれども、これも「強くそう思う」50%、「ややそう思う」38%の合計、約9割の学生が「そう思う」と答えてくれますので、これもまた非常に評価は高かったのかなと。新たな思考を展開するという

ことは大変難しいことですが、先ほど言ったように、普通に生きていたってコンクリートに覆われたこの地面に、昔は何があったのかなんて考えて生きている人ってこの世の中に一人もいないと思うんですけど、それを私が、実はそうじゃない、その前には400年の歴史が足の、アスファルトの下にねむっているんだみたいな話をしていますので、恐らくびっくりして、それで新しい考え、都市に対するものの見方、あるいは空間のロジックがある特定の場所を発展させたり衰退させるということに気づいてもらえたということだと思います。ちょっと動画型授業とは関係ないですが、内容としてそういったところが学生に評価されたということですね。

ここからは、対面の授業と比較して動画による遠隔授業だからよかったと思ったこと、よくなかったと思うことを書いてくださいという自由記述なんですけど、まずよかったと思ったことは何かということで、これは動画になったゆえにということなんですけど、何度でも視聴できるということ、動画もまナビネットに載せていたんですけども、何度でも見返したと。学生によっては90分の授業なんだけれども、何度も止めたり、行ったり、戻ったり、3時間ぐらいかかりましたと、毎回。これはとんでもない恐ろしいことです。気づいたらこんなに時間を消費していましたと。確かに動画を垂れ流すのは簡単なんですけど、ストップアンドゴーで何度も何度も見て穴埋めをしていくので、意外と時間がかかっちゃうんですよみたいなことを学生が言っていましたけど、それがあ意味よくて、理解が深まったのかなと。確かに、対面の場合は今しゃべっていったものがその瞬間流れて消えていってしまいますけれども、動画だったら私の話を繰り返し聞けるというところが、これは本当にメリット以外の何物でもないことなんだろうと思います。

図（グラフ、表、写真）や地図が多く用いられて分かりやすかった、これは先ほどのプリントのように、地理学は地図や図表、写真が非常に重要ですので、ビジュアル中心主義と揶揄されることもありますけれども、その点は、恐らく対面でも動画でも同じように評価をされたんだと思います。私の授業は人気だったみたいで、楽しんでもらえたようです。

重要なのは、次なんですけれども、「大学で授業を受けているのと同じような授業がオンデマンドでできたのがとてもよかった」と、一体対面で授業をするのと動画で授業をしたのと何が同じような感じなのかということですね。それが次のコメントですね。「先生は顔を出し、音声ありの授業をしてくださって、機械的な作業にはならなかった」。つまり私の動画には、ワイプの形で常に顔を出しておりまして、音声だけでなく、私の全身のパフォーマンスがパワーポイントの下小さい窓枠にいつもいるんですね。その結果何が起ったのか。「授業を受けているという実感が湧き、先生に見られている感じがして、とても集中して聞くことができました」というコメントが来たんですね。これはこの授業だけでなく、ほかの授業も同じく動画でやったんですけども、それも同じようなコメントを出してくれた学生がいて、先生に見られている気がして、動画なのにパソコンの前で背筋をピンと伸ばして90分聞いていましたというメールが後で来たことがありまして、なるほどなと、私は別に何となく顔を出したほうがリアルな授業の感じがするからいいかなと思っていただけなんですけど、見ている側は何か私に見られている感がすごくあるみたいで、対面でやっているとき、あるいはそれ以上に何か先生がそこにいるという感じでモチベーションをすごく維持できたり、あと緊張感を持てたということで、恐らく多くの先生が声だけでパワーポイントを作られていたんじゃないかと、これはファイルの重さの問題もあるし、パソコンのスペックの問題もあって、バージョンが古いパワーポイントだと音声しか乗らないんですけども、私が持っているサーフェスの最新のモデル、最新のパワーポイントだと、顔の動画も一緒にセットで撮れるんですね。それを使ったんですけども、別のコメントにも書いてあるとおり、「多くの先生方が声だけでパワーポイントにふきこんでいらっしゃいましたが、先生はしゃべっている様子を動画で入れてくださったので、授業を受けている感覚に近づきモチベーションがかなり上がり、楽しく受講することができました」。括弧で、「家族で楽しませていただきました」ってとんでもない子がいて、私の動画を見るのに背後にご家族がいるということを考えるだけでへこみますけれども。

さらに、「課題の提出もきちんとできているか不安なことが多かったのですが」、重要なのは次でして、「先生はきちんとメールで届いたことを教えてくださったので安心できました」という、ほかの先生は「出したよ、もらったよ」という返事が返ってこないんだと。僕はえっと思ったんです。普通返しますよね、課題をもらいましたよと。私は24時間以内に必

ずメールで返事を出しましたので、つまり100名を超える学生から、1回の授業が終わった後に100通以上の課題提出のメールが来るんですが、全部返事を書きました。こういう努力をほかの先生がもしされていないんだとすれば、それは相当なマイナスではないかな。どうも学生はかなり不安で、1年生なんかは届いたのかな、届いていないのかな、あるいはまなびネットに上げたらなおさらですけど、見てもらえたのかな、もらえていないのかな、出席はオーケーだったのかと相当不安になったようですが、私はまず「届いたよ」というメールを必ず返します。それだけじゃなく、提出された、先ほどの課題のプリントも全部目を通し、間違っていたら「違うよ」と書いて、さらに記述で解答を求める部分もあるので、理解の浅い場合は、こういうところに着目し、授業ではこういうふうにしやべったから、もう一回動画を見直したらどうだいというコメントを100名に対してつけました。毎回です。10回以上の授業の中でやりました。それは確かにすごく面倒くさかったんだけど、学生からは、「なるほど今話でもっと理解ができました」とメールが返ってくるのがあって、私の授業で相当評価がよかったのは、こういう努力が私が怠らなかったという結果であり、授業の動画やフィールドワーク、課題提出の際のメールのやり取りを通して先生とつながりが感じられたと、ここなんです。画面にいただけでなく、メールを出したらメールの返事が返ってくる、全て返ってくるわけですね。中には、100名いたら毎回10人ぐらいは授業の感想を書いてくれたり、さらに疑問に思ったことをメールで書いてくれる、それにも100%返事を出しました。しかも相手が10書いてきたら私は50ぐらいの返事を返すわけですが、毎回ですね。そうするとまた返事が返ってくるとなる。たまにですが、それにまた返してあげるんですね。こういうやり取りを毎週、毎週動画をアップロードしたあとに、次の動画のアップロードの間までにやりました。これを努力と呼ぶのではないのでしょうか。

最後、「こういう動画が残っていくのは財産です。昔の地理の写真や地図など地理学的に貴重なものを何度も見ることができます」。いいんですけど、何度も動画を見るたびに、私の顔が何度も学生の前に出てくるというのは、ほんとに穴があったら100回ぐらいい入りたい気持ちなんですけれども、どちらかといえば差し上げるよと、どうぞ自分の糧にしてくださいというつもりで、私の授業ですけれども、私が何十時間もかけて作った授業ですが、名古屋の街はみんなのもので、君たちにあげるよという気持ちで何度でも見てください、もう私の顔はどうでもいいからというつもりで私は差し出しておりますので、こうやって言ってくれる学生がいて非常によかったんじゃないかなということです。

一方で、よくなかったことですね。「他の人との意見交換ができなかった、その場で」、これは本当に動画の限界で、家で見ている限り、オンラインではないので質問があってもチャットも受け付けませんし、横の人たちと話をすることも一切できないので、これは動画型授業の限界以上の何物でもないんですが、その場での質問や意見交換ができないため、自分の学びの不安がある、そういう不安を解消するための私とのメールでのやり取りというふうに思っただけだと、一応はカバーはできたのかなと。「意見共有や議論ができなかった」。そうですね、ちなみに私の授業は90分私が1人でしゃべり続けるので、はっきり言って対面で来たとしても基本授業内でのディスカッションはゼロなんですけどね。

4番目は、「先生方に質問をするハードルが高く、課題をこなすのが難しかった」というふうに書いてあって、「先生方に」と書いてあるので、ひょっとしたら私のことではなく、私以外の誰かのことなんじゃないかというふうに思っていますけれども、私への質問は幾らでも受け付けますというスタンスでおりましたので、課題もプリントA3だけですのでそんなに難しくはなかったと思いますけれども、どうも聞いた話によると、オンデマンド授業ではすごい課題がいっぱい出て、大変だったと何人か学生が言っていましたから、恐らく全体的に過剰な課題をこなすのに苦しかったという意味ではないかなというふうに理解しております。

ちょっと時間がないのであれですが、「フィールドワークは授業で学んだことを実際に目で見ることができ、非常に有意義な時間だった」ということで、オンデマンドにフィールドワークを組み合わせただけことは非常によかった。それから「オンデマンドでも楽しく工夫がありよかった」。今から実際に授業で使った動画を見ていただきますが、「遠隔授業でも先生のお話がとても面白いことから地理学の面白さを十分に感じる事ができた」、「地理学基礎Ⅰのような90分間先生がお話される授業はほかになかったため、最も大学の授業らしく感じる事ができ面白かった」。実はここが重要でし

て、先ほど言ったように90分間本当に私がずっとしゃべっているんですけども、時事ネタでね。そういう努力を対面授業と同じように動画でもやったんですね。多分それがすごくよかった。学生にとって。決して顔出しや声だけではないということなんです。

もう一つは、ここなんです、90分間しゃべる授業というのが大学なんです。昨今のアクティブラーニングの影響を受けて、大学の授業がアクティブな感じになっているのは悪いことではないかもしれないけど、果たして学生はそんなものを求めているのかなと私は実は思っているところがありまして、やっぱり大学でもシャワーみたいに知識を浴びせて、あなたたちももっと考えてこいよと言うほうがいいんですね、彼らは飢えているんですね、ものすごく知識に。愛教大の学生は頭がいいので、何かやっぱり自分の知らない世界を見せてほしいとどこかで思っている。それができるのは果たしてアクティブラーニングなのかと私は思うところがあって、私自身がアクティブラーニングの授業はほとんどやらないので、私だけがアクティブ、君たちはネガティブだっていって、授業を聞いていなさいっていつも言ってますから。前期で学生が最も実は大学の授業らしく感じたのは、アクティブラーニングの授業ではなく、90分間しゃべり続ける私の授業だったってことなんです。アクティブラーニングが悪いわけじゃないけれども、本当はアクティブラーニングじゃなくても学生に何かを感じさせる授業ってできるので、それにフィールドワークなんかも組み合わせて、地理だからやれるんですけども、理論と実践の往還もできるはずなので、何かもうちょっといろんなタイプの授業があつていいじゃないかというふうにこの部分は思いました。

講義の内容がこのような形になっておりまして、前半が名古屋の都市の歴史地理学ということで、時間と空間の400年を追いながら名古屋の発展史をたどるという授業で、一番最初に名古屋城ができてから現在の形に至るまでの話をダイジェストでしゃべった後に、名駅と栄と大須をそれぞれ取り上げて、それぞれの街が何で現在のような雰囲気を持っているのかということを歴史地理学的に読み解いていくという授業になります。大須にかつて遊郭があつて、その後中村遊郭といって名駅の裏に移転するんですけども、遊郭が大須の発展にいかに関与を与えたかという話なんかも、遊郭の文化史みたいな話と都市空間の形成との関係の話をしります。

それから後半は都市の文化地理学ということで、文化的なものが名古屋の都市の発展にどのように影響を与えたのか、地下街文化、デザイン都市が名古屋をどう造ったのかという話。それからメディアとまちづくりってことで、円頓寺商店街と映画を使ったまちづくり、それからローカルアイドルと大須のまちづくりとの関係性について話をします。名古屋の変貌を後づけていくということで、例えば実際に大須に行つてですね、ここでアイドルが踊ってるんだよという話を見せてあげると、学生はすごい喜ぶわけですね。

最後に、フィールドワークでこれらを見たものの全部体感することができるという、最初から最後まで私の思惑どおりに進む授業というふうになっております。学生の意見が入る余地は一切ございません。

ちょっと全部はお見せできませんが、動画をご覧ください。

(上映開始)

皆さん、こんにちは。

1週間ぶりでしたけれども、皆さんお元気でいらっしゃいますでしょうか。コロナのせいでそれどころじゃないよという声が聞こえてきそうですけれども、御安心ください。私もまあ、皆さんと同じような状況ですから、再びみなさんと授業で対面できる日を楽しみにしながらお互い頑張っていきましょう。

今、ご紹介した名古屋市がこれからみなさんにね、半期おつきあいいただく街だよということになっているわけです。今ですね、人口が232万人くらい、面積が320平方キロメートルくらいという話をしましたけれども、人口密度でいうと大体幾らぐらいだろうかということなんです、単純に232万を326で割っていただければおよそ7,000人くらいですね、1平方キロメートル当たり7,000人くらいの人口密度で、日本全体の平均人口密度というのは300から400人くらいだったと思いますけれども、それに比べれば7,000人ですから、いかに日本の平均に比べて人口密度が高く、すなわち大都市の条

件を持った街であるのかということが7,000人という数字からわかりますね。1平方キロメートル当たり7,000人の人口密度があります。

面積が326平方キロなんですけど、これ、もちろん覚えるのはしんどいですけど、実は簡単に理解することが可能です。というのはどういうことなのかというと、先ほどこっちと名古屋というのは円形に近い形をしているんだという話をしましたけれども、ちょうど名古屋の真ん中にある中区、実際には物理的には真ん中ではないですが、名古屋の中心地、中区辺りにコンパスのはりを刺していただいて、そこから半径10キロメートルの円を描いていただくと大体名古屋市がすっぽりおさまるようにできています。円形に近いですからね。円の面積は半径×半径×3.14ですから、 $10 \times 10 \times 3.14$ で大体314平方キロメートル、はみ出た守山区も足していただくと大体320平方キロメートルぐらいになるよということで、実は結構名古屋っていうのは、そう考えてみると面積は理解しやすい形状ということです。ですから、ちょうど端から端まで直径で約20キロぐらいの距離感だというふうに理解していただければ結構です。これが名古屋の空間的な広さということになります。

ここまで基礎的な情報ですけれども、いよいよ名古屋というまちを空間的に考えるということをしていかないと、地理的な物の見方、考え方で名古屋を見ると、どんなことが見えてくるのかという話をしないとですね、授業の趣旨に合致しないわけですから、少しずつそういう話に入っていきたいと思います。

ということで、名古屋を空間的に見ていきます。

実は大きく3つの空間の謎が潜んでいました。3つです。この名古屋を空間という側面から捉えてみると、大きな謎が3つ存在しています。3つの空間的な謎。この謎はどんな謎なのか、その話から入ってみたいと思います。

まずは1つ目の空間の謎です。JR路線の謎ですね。名古屋は主要なJRが全部で3本走っています。まず1つ目、JR東海道線、JR東海道線は北西方向から南東方向にかけて斜めに抜けていく、もちろん東海道ですから東に行くと東京、西に行くと大阪に接続する名古屋市を走る主要なJR路線、在来線ということになります。

2つ目が、ちょうどJR東海道線の真ん中ぐらいからVの字に逆方向に進んでいってる路線、これがJR中央線になります。このJR中央線は江戸時代の主要街道である中山道のルートに沿っていままで名古屋を抜けていった先は岐阜県、そして、やがて長野県の塩尻にたどり着きます。塩尻でバトンタッチして、今度は東のほうに向かっていくと、その先にあるのは東京ということになるわけです。ですから名古屋にもJR中央線がありますが、実は東京にも同じようにJR中央線というのが存在しています。

この2本に加えて、さらに3本目が、今度西に向かうJR関西線という、ちょうどこのJR東海道線から逆側、西側に向かって分かれているんです。これも関西線ですから、西に行くとやがて大阪にたどり着くわけですが、東海道線が北のほうから大阪に向かっていているのに対して、関西線は南回りで西の大阪に向かっていている路線ということになります。

この3つが名古屋を走るJR路線ということになっているわけですが、この3本のうち、名古屋を空間的に見た場合、重要な路線は、ピンク色に塗った2つのJR東海道線とJR中央線、この授業の中でとりわけ重要なのは、この2本のJR路線の、特に走り方、通り方ですね。見ていただくと、東海道線と中央線がまるでアルファベットのYの字のように見えませんか、Y。先ほどですね名古屋は円形の形をしているんだというふうにお話ししましたので、空間的な形を見てみると、名古屋における2本の東海道線と中央線の走り方は、円にアルファベットのYの記号の文字が刻まれた空間配置をしているということになるわけです。

しかし、先生、偶然Yなんじゃないですか？と思うかもしれませんが、これは偶然じゃないんですね、ちゃんと都市の形成のロジックの下でYにならなければならなかった。UとかOじゃなくて、Yじゃなきゃいけない理由があったんですね。それは名古屋の都市空間の形成の歴史を知っていれば、どうしてYになったのかということがよく分かるわけです。ちゃんと理由があるんですね。ちなみに、この東海道線と関西線の分かれ目に立地する駅ですね、これが名古屋駅、通称名駅でございます。ちなみに名駅というのは正式名称ではなく、名古屋駅のニックネームみたいな略称になるわけです。

が、非常に面白いことに、名古屋人は名古屋駅のことはみんな名駅、名駅って、言うわけです。名古屋弁なのか分かりませんが、みんな名駅と言うんですね。しかも、この名駅の周りに名駅何丁目っていう住所になっているんですね。全国的に見ても非常に珍しいそうですが、略称が正式な地名になっている非常に珍しい例だと思います。それぐらい名古屋人にとっては名古屋駅はイコール名駅、この授業でも名駅と言っていきたいと思います。関西線と東海道線の分かれ目に立地しているのが名駅、そして東海道線と中央線のこの分かれ目に、Vの字ですね。下に立地しているのが金山総合駅、名駅も金山もいずれも地下鉄の1日の乗降客数では一、二を争う非常に大きな駅ですね。愛教大に通う皆さんにとっては金山駅のほうがなじみがあるかもしれませんが、ここは名鉄も通っていますので。ここで名鉄に乗り換えていただくと知立駅まで来ることができますから、特に名古屋の西側に住んでいる人は、この金山を経由して来るという人が結構いるんじゃないでしょうか。

(上映終了)

これ以上お見せすることはできないんですが、こういう授業を90分間ずっとしゃべり続けています。お気づきになられたかどうか分からないんですが、実は何枚目かのスライドに切り替わるときに、これは別の日に撮影しているんですね。服も同じだし髪形も同じじゃないかと思うかもしれませんが、最初はやっぱり90分しゃべる動画の作製が難しくて、しゃべり過ぎちゃうので、1時間50分ぐらいしゃべっちゃうんですね。それを短くカットして撮り直しの撮り直しを何度もやって、最後のほうは慣れてきまして一発撮りで1日で終わったんですけども、なかなかうまく1時間半では収まらないんですね。ふだんだったら時計を見ながら、ちょっと今日は話が長くなるからカットしようとかやるんですけど、動画だとどうしてもしゃべってしまう、必要だと思ってしゃべってしまう。なので1日で撮影が終わらなくて、最初は1本の動画を作るのに3日ぐらいかかるんですね。その3日間どうしていたかという、3日ともわざわざ同じ服を着ているんです。同じ場所に行き、同じ服を着、同じ髪形にしてパソコンの前にスタンバイしているんです。同じ角度のカメラになるように机に置き、学生にとっては一切違和感がない、いわゆるドラマの撮影の、別の時に撮っているのに同じ時間帯に見えるようにやっているんですね。恐らく声だけの動画だったらそんなことをする必要は全くないんです。でも、私は動画で顔が映ることにこだわったんですね。やっぱり私の顔を見ているほうが迫力があるだろう、私の顔を見ながら、私も君たちのことを見ているよという、こういうパフォーマンスで、目の前にどーんと出てくるわけです。そこにこだわったんです。その結果、非常に大変なことが起こり、研究室で同じ服を3日間も着て、同じ髪形で動画を撮影しているんですけども、果たして学生評価が私よりも低かった先生方がここまで努力をされたのかどうかということを問わないといけないわけですね。私は相当努力しましたよ、本当に。もうすごい時間がかかりました。でも、それが学生の評価になって跳ね返ってきたんだというふうに考えると、あれだけ髪形を整えて、その間に散髪も行かなかったんですから。だって短くなったらおかしいじゃないですか、違和感がある。1つ撮り終わって散髪に行って、次は髪の毛が短い状態で続いていくという、ちゃんと動画の切れ目まで全部計算して前期の生活を全てそれに注いだわけですね。でも、これが努力というものではないでしょうかというのが、私の聞きたいところで、ここぐらいまでやると動画でも結構対面の雰囲気を少なくとも学生に伝えられる。でも実際にはマイナスがありまして、なにかというと、後期の授業は全部対面に戻したんです。下手になってました、しゃべるのが。始まったときに、自分が何しゃべっていいか分からない状態になってたんですね。授業の腕が落ちたなと思ったんです。動画は編集ができてしまうので、しゃべり直しがきくので失敗しても全然緊張はしないんですけど、対面授業とはライブパフォーマンスなので緊張すると、何か下手になっちゃうんですね。やっと最近勘が戻ってきたんですけども、そこは腕が落ちるので、やっぱり対面はやり続けないと駄目だなというのは結論としてございます。

やや長くなって大変申し訳ございませんでしたが、以上が私のオンデマンド型授業のメッセージということになります。ありがとうございました。

【司 会】 阿部先生、ありがとうございました。

ここで質問を受け付けたいと思いますけれども、フロアの方からいかがでしょうか。

質疑応答部分については個人情報を含むため削除

【司 会】 じゃあ私のほうで閉めさせていただきます。

お二方の、本当に今日の発表の準備も大変だったんじゃないかと思ひまして、まずもって感謝申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。なおかつ阿部先生に至っては2年連続ということで今日初めて知りまして、申し訳ありませんと同時にありがとうございますということと、2年連続ってことは3年連続ってこともあるかもしれませんが、またその機会があったらよろしく願ひします。

それから、お二人の紹介を聞いて、何かしら示唆を得た、ああいうやり方できるんだなということが分かつと同時に、何よりも共通点を私は感じたんですけども、ご専門の内容はもちろんのことなんですけれども、自分が乗っているなという感じが。のりですごく内容が充実しているということを感じましたし、一般的に学校の先生方によい授業とはって聞くと、この答えはよく聞くんですね、よく準備ができた授業、それがよい授業ってことで。本当に準備にお時間かけたということと、いろんな慣れないZ o o mの手続とかあつて、いろんな操作も見つけたということで、物すごく私たちにとつて大きな示唆になったんじゃないかと思ひます。改めて、終わりに際しまして感謝を申し上げましてこの会を閉じたいと思ひます。本当に今日はありがとうございました。

当日の配付資料

「私のオンライン授業紹介」



1

リアルタイム型(ZOOM)の実践紹介

- ・ 実技(初等保健体育科教育内容AⅡ)
- ・ 1人でも出来る(リズムダンス)

・・・とにかく、やってみよう！
(学生への学習環境調査、配慮も踏まえて)

2

結論「やってよかった！」

- ① 学生からのフィードバックから
- ② 教員自身の発見から
- ③ 思いがけない広がり話

3

① 学生からのフィードバックから 授業評価より

- オンラインならではの楽しさがあって、この状況になってしまったことをプラスに捉えることが出来た
- オンラインでこんなに楽しい授業ができるとは思わなかったので感動した
- 周りに流されずに自分らしい動きができる
- 孤独感を感じず楽しかった
- 実際に体を動かしてできたので、対面のような授業が受けられた
- みんなの動きをおそらく対面授業以上に見て回れた
- ダンスを通して人と人が繋がっているのを感じ取れた

リアルタイムの価値

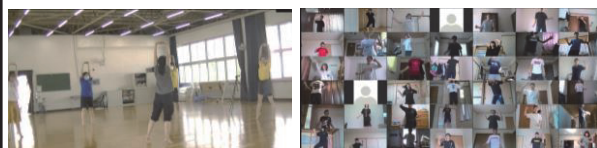
4

② 教員自身の発見から

1. 対面よりもできたかも
2. 対面と同じことできたかも
3. 対面でしかできない

5

②-1 対面よりもできたかも (ギャラリービュー)

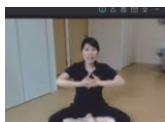


【教員】1人1人の動きを把握
名前を呼んでのフィードバック

【学生】自分のペースで動ける
動きの発見
動画での復習

6

②ー2 対面と同じことができたかも (ブレイクアウトルーム、スポットライトビュー)



【教員】見回りができる
よい動きの学生抽出

【学生】グループ創作
即興的な動きの真似

7

②ー3 対面でしかできないこと



【教員】音と身体の一感



【学生】コンタクト、息遣い

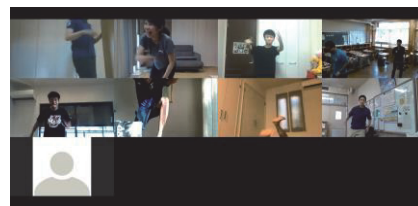
8

③ 思いがけない広がりのお話

1. 実技研修会【社会貢献】
2. 附属の先生と研究【教育・研究】
3. M1Aの教材共有【教育】

9

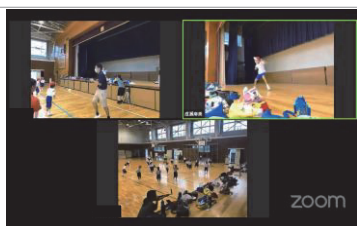
③ー1 実技研修会(WITHコロナ時代)



現場の先生方のニーズにこたえることができた

10

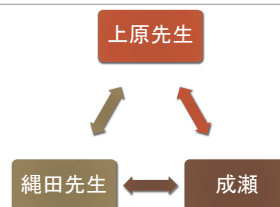
③ー2 附属の先生との研究



附属小をリアルタイムでつなぐ 附属高校との共同研究

11

③ー3 M1Aの教材共有



録画動画だけではなく、オンデマンド型の資料も

12

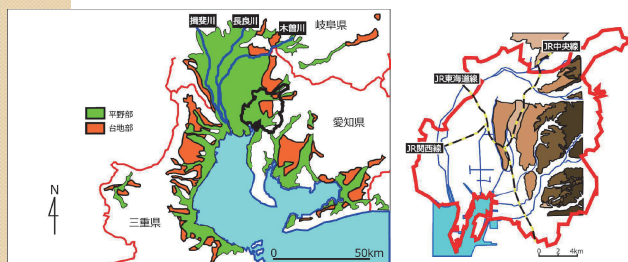
実践を終えて・・・

1. 準備をとにかく大事に(トラブル最小限)
2. やればやるだけノウハウがたまる
3. 対面の価値を再考

2021年2月15日（月）：全学FD集会

『地理学基礎Ⅰ』の工夫

—「私のオンデマンド型授業」—



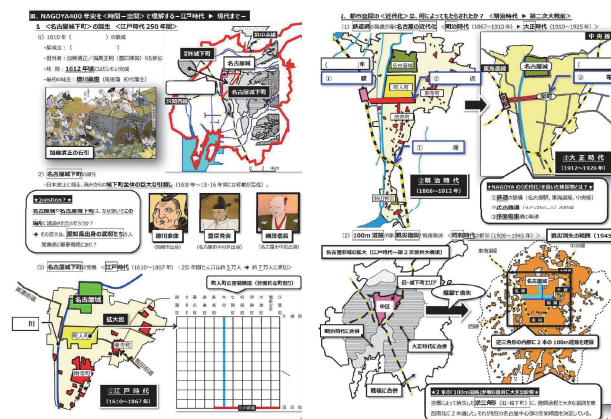
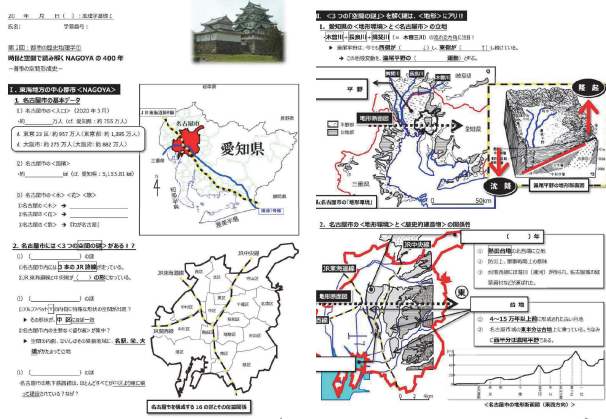
阿部亮吾（社会科教育講座、地理学）

I. 地理学基礎Ⅰの概要

(1) 地理学基礎Ⅰとは？

- ▶ 社会科専攻（1年生向け）地理学の入門科目
- ▶ 前期・木曜日4限
- ▶ 115名（2020年度）（社会科以外を含む）
- ▶ 社会科専攻の学生が2年生に進級する段階で、**地理学専修を希望する学生の専修分け判定基準**

① **プリント課題の提出**



I. 地理学基礎Ⅰの概要

(1) 地理学基礎Ⅰとは？

- ▶ 社会科専攻（1年生向け）地理学の入門科目
- ▶ 前期・木曜日4限
- ▶ 115名（2020年度）（社会科以外を含む）
- ▶ 社会科専攻の学生が2年生に進級する段階で、**地理学専修を希望する学生の専修分け判定基準**

① **プリント課題の提出**

② **最終レポートによる評価**

地理学基礎Ⅰ（2020）

阿部先生に教えたい！
「名古屋におけるCoCo 老番屋」
「C戦略の地理学」

レポートのテーマ：
阿部先生に教えたい！
「××における〇〇の地理学」
(場所) (トピック)



図4 3つの調査地域の位置と経緯
①名古屋市内のCoCo 老番屋の位置と経緯
②名古屋市内のCoCo 老番屋の位置と経緯
③名古屋市内のCoCo 老番屋の位置と経緯

4.調査の動向・分析

①場所メモ
Cafe 常盤坂の横の目録



外観から中身の様子が見えない。無差別に目録と比較すると動向が異なる。調査後も必ずしも一致する。

いざ入店。店内に入るとすぐに調査の目録が置いてあった。後、動向が異なるという結果であった。

調査は3時〜4時のサタデーが中心だったが、その結果動向の人数が2割。18代の男女グループや20代前半の男女が中心だった。

調査が終了した。その様子として、調査結果と動向が異なるという結果であった。

調査が終了した。その様子として、調査結果と動向が異なるという結果であった。

調査が終了した。その様子として、調査結果と動向が異なるという結果であった。

調査が終了した。その様子として、調査結果と動向が異なるという結果であった。

I. 地理学基礎 I の概要

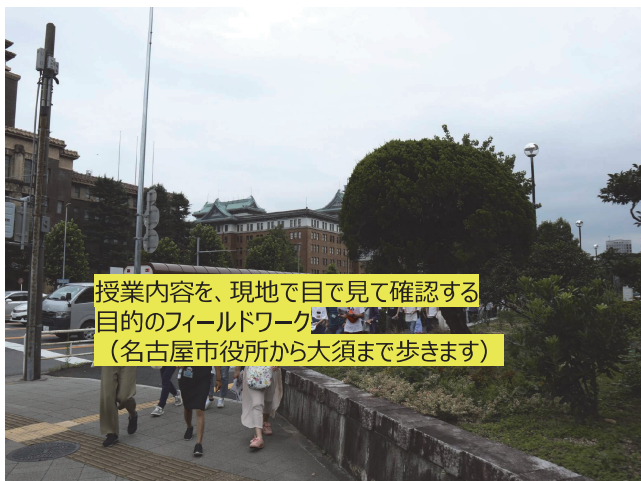
(1) 地理学基礎 I とは？

- ▶ 社会科専攻（1年生向け）地理学の入門科目
- ▶ 前期・木曜日4限
- ▶ 115名（2020年度）（社会科以外を含む）
- ▶ 社会科専攻の学生が2年生に進級する段階で、**地理学専修を希望する学生の専修分け判定基準**
- ①プリント課題の提出
- ②最終レポート評価
- ②名古屋市のフィールドワークへの参加は必須

I. 地理学基礎 I の概要

(2) 学生の評価とコメント

- ①問1 授業で指示された課題・参考文献・資料などを自ら参照した上で、**自分で問題点を深く考えた**。さらに、その考えに基づき**行動した**。
- 強く思う+ やや思う **89%**



授業内容を、現地で目で見て確認する
目的のフィールドワーク
(名古屋市役所から大須まで歩きます)

I. 地理学基礎 I の概要

(2) 学生の評価とコメント

- ①問1 授業で指示された課題・参考文献・資料などを自ら参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した。
- 強く思う+ やや思う **89%**
- ②問2 授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、**新たな思考を展開した**。さらに、その思考に基づき**行動した**。
- 強く思う+ やや思う **88%**

I. 地理学基礎 I の概要

(2) 学生の評価とコメント（抜粋）

- ③<自由記述> 対面式の授業と比較し、**遠隔授業だからこそよかったと思う**こと、よくなかったと思うことがあれば記述してください。
- 1. 何度も視聴できること
- 2. 図や地図が多く用いられていてわかりやすかった。
- 3. 内容は面白い、他の学生にも人気だったみたいだ。
- 4. 大学に行かなくても済んだため、通学時間が短縮できた。**大学で授業するのと同じような授業がオンデマンドでも出来たのでとてもよかった。**
- 5. 先生は**顔出し、音声ありの授業**を行ってください、機械的な作業にならなかった。
- 6. 授業を受けているという実感が湧き、**先生に見られている感じがして、とても集中して聞くことが出来ました。**

I. 地理学基礎 I の概要

(2) 学生の評価とコメント (抜粋)

③<自由記述> 対面式の授業と比較し、**遠隔授業だからこそよかったと思う**こと、よくなかったと思うことがあれば記述してください。

7. 多くの先生方が声だけをパワポに吹き込んでいらっしゃいましたが、先生はしゃべっている様子(動画で)も入れてくださっていたので、授業を受けている感覚に近づき、モチベーションがかなり上がり、楽しく受講することができました(家族で楽しませていただきました)。課題の提出もきちんとできているか不安なことが多かったですが、**先生はきちんとメールで届いたことを教えてくださったので**確認もでき、安心できました。
8. 授業動画やフィールドワーク、課題提出の際のメールのやり取りを通して、**先生との繋がりを感じられた**、とてもやりがいを感じた授業でした。
9. 動画が残っているのが財産です。昔の写真や地図など地理学的に貴重なものを何度も見ることが出来ます。

I. 地理学基礎 I の概要

(2) 学生の評価とコメント (抜粋)

③<自由記述> 対面式の授業と比較し、遠隔授業だからこそよかったと思うこと、**よくなかったと思う**ことがあれば記述してください。

1. 他の人と意見の交換をできなかったこと
2. その場での質問や、意見交流ができないため、自分の学びへの不安があった。
3. 意見の共有や議論ができなかったことが、良くなかった。
4. 先生方へ質問をするハードルが高く、課題をこなすのが難しかったこともあった。

I. 地理学基礎 I の概要

(2) 学生の評価とコメント (抜粋)

④<自由記述> その他の意見

1. フィールドワークは授業で学んだことを実際に目で見ることができ、非常に有意義な時間だった。
2. オンデマンドでも学びをさせさせる工夫があり良かった。
3. 遠隔授業でも、先生のお話がとても面白いことから地理学の面白さを十分に感じることができた。**地理学基礎 I のような、90分間先生がお話しされる授業は他にはなかったため、最も大学の授業らしく感じることができ、面白かった。**先生が画面下に映っていたことも、先生との距離が近く感じてより楽しく授業に取り組むことができた要因の一つではないかと思う。

II. 地理学基礎 I の授業風景

(1) 講義の内容 (シラバス)

都市の歴史地理学
都市の文化地理学

- ・名古屋の都市空間形成史
- ・盛り場空間①【名駅編】
- ・盛り場空間②【栄 編】
- ・盛り場空間③【大須編】
- ・遊郭からみた名古屋論
- ・地下街空間の名古屋論
- ・デザイン都市の名古屋論
- ・まちづくりとメディア・コンテンツ①【円頓寺商店街編】
- ・まちづくりとメディア・コンテンツ②【円頓寺商店街編】
- ・まちづくりとローカルアイドル【大須商店街編】
- ・名古屋市内のフィールドワーク

(2) 講義の動画 (例)

